

Title	幕末軍艦咸臨丸(文倉平次郎編, 巖松堂書店發行)
Sub Title	
Author	會田, 倉吉(Aida, Kurakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.17, No.2 (1938. 11) ,p.188(334)- 190(336)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19381100-0189">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19381100-0189</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

進んで斯くの如くにして成立した株仲間の實體が問題になる。第三章「株仲間の組織」、第四章「株仲間の機能」が即ちそれである、その中、株仲間の機構に現れた精神を宗教的精神、保守的精神、連帶的精神の三つとなし、これら經濟外的な精神を有する株仲間は、單なる功利的團體ではなく、血縁團體、地域團體より脱し切らぬ活動團體であり、そこに株仲間の共同社會性が認められると説かれてゐるのや、その共同社會性の故に株仲間には絶大な信用があり、(株仲間の機能はこの信用を裏付けるものに外ならなかつた)それは遠隔地との取引等に特に大なる使命を果したと論ぜられてゐる等は重要な點である。

かくて著者は再び歴史的敘述にかへつて、第五章「株仲間の衰頹」を天保改革以前の狀態、天保改革に於ける停止の事情、嘉永四年の再興以後、安政以後の四段に分つて説明し、更に進んで明治維新に於ける株仲間解放の事情と、その轉身としての同業組合の發展に迄及んで居られる。(第六章「株仲間の解放」、第七章「同業組合の發展」)

第八章結論に於いて、著者は株仲間を座及び同業組合と比較することによつてその特性は近世社會の特質がそのまゝ反映されたものであると做し、その近世社會の變質、衰頹と商業資本の特性より生ずる内在的理由とに、株仲間衰頹の原因を求められてゐる。

本書は著者が過去數年來發表せられた多くの論文を骨子として、體系的に綜合されたものである。吾々は此の書によつて、我國のギルド的結合の組織と精神、又その歴史的變遷を興味深く理解することが出来る。もとより、箇條書の形式を多く採られた

め、敘述に圖式的な嫌ひがある點、又史料が地域的に制限されてゐる點等が指摘されないではないが、此の方面に於ける最初の綜合的研究として、特に後學者のための手掛りとして、裨益する所大なるものあるを信じる。

この有意義なる研究を成就された著者に敬意を表し、拙き紹介の筆を擱く。(有斐閣發行・定價四圓二十錢)(中井信彦)

### 幕末軍艦咸臨丸

(文倉平次郎編  
巖松堂書店發行)

萬延元年幕府は海外への始めての使節を米國へ送つたが、その時同使節一行護衛のためとて他に別の一艦がまた派遣せられた。その任に選ばれたものが咸臨丸であることは茲に改めて云ふまでもない。同艦は之がために遙々鵬程萬里の波濤をついて我が國としては最初の太平洋横斷と云ふ壯舉をなしとげると至り、而もその結果として日米外交交通史上は勿論或は我が海軍創建史上にも、或は新しき時代の文化伸張のためにも、極めて甚大なる價値と影響とを示すこととさへなつたのである。しかし夫れは先づともかくとして斯うして咸臨丸が此の航海により新興日本の心意氣を遠く異國にまで輝かしたことは蓋し幕末史上の一異彩と云はれなければならぬであらう。

今回文倉平次郎氏の多年にわたる咸臨丸研究が遂に實を結んで茲に鴻著「幕末軍艦咸臨丸」の刊行を見るに及び、前述の米國行の事情はもとより、咸臨丸に關する限り凡そ一切の事蹟が極めてつづさに傳へられるに至つたことは、以上の意味からして誠に悦

ばしいことである。それにまた若し茲に一私情について語ることが許されるならば、吾等の塾祖福澤先生も當時同艦の一乗組員として始めて海外の地を踏まれた一事を思ひ合せて、本書に對し一層深い興味を覺えるものがある。

本書の内容は大體、第一幕末軍艦威臨丸（一—四〇四頁）、第二威臨丸餘談（四〇五—四八七頁）、第三威臨丸航米記錄（四八九—六七八頁）、第四亞行威臨丸乗組員略歴（六七九—七四九頁）の四編と附録の「徳川幕府艦船譜」（七五一—七九一頁）とからなつて居るが、その中心となるべきものは勿論第一編の全二十六章にあつて、そこには同艦がオランダから購入せられたはじめより、後年明治政府の手に移つて老朽のため遂に廢船となるまでの艦歴が精細にして且つ正確に説かれて居る。尤も強ひて云へば明治三年それが民間の一回漕會社に拂下げられて以後の事情については猶ほ不明とされて居るのであるが、しかしそれは必ずしもなければならぬわけでもあるまい。軍艦とは云ふものたかゞ百馬力を有する三百噸程度の一小汽船たるにすぎない威臨丸も斯うして立派な傳記を持つこととなつたわけである。それから本編中第十四章に引用せられて居るハワイ寄港に關しての同地の新聞記事は會つて本塾の清岡暎一氏により原文のまま本誌（十六卷二號）に掲げられたことがあるから特に参考のため云ひ添へておかう。次に残りの三編は云はゞ之に對する補足的なものとも見られ、就中第三編は同艦の渡米に關する資料そのものの紹介で、時に司令長官格であつた木村攝津守の紀行と測量方小野友五郎が記したらしいと云ふ帝國圖書館所藏の航米日記との二編が採録せられ、その他

之に關する参考書目や同日誌中にある用語の説明などまで懇切に記されて居る。また第二編の餘談に至つては實に同艦のありとあらゆる關係事項が細大洩らさず網羅されて寧ろ研究餘談としての興味に満たされて居る。

併し筆者はいま茲に本書を紹介しようとするに當つて以上の外特に強調したいと思ふ二つの點をもつて居る。その一は文倉氏が此の研究に着手せらるゝに至つたと云ふ美しい動機と、他の一は之が研究完成のために今日まで殆んど一生を捧げて盡瘁せられた同氏の尊い努力とについてである。

「明治三十一年春、筆者（文倉氏自身）は北米桑港に於て、端なくも土中に埋没したる威臨丸乗組水夫の墓を發見せし事が動機となり、威臨丸の事蹟を調査した。後不幸にも二度の天災にて蒐集した資料を失ひ、著作を斷念したが、近年再び資料を集め漸く此著を成したのである。」

とは緒言中に見る一文なのであるが、恐らく以上の二點は此の文中からも既に察せられよう。同文中水夫とあるのは本書中（四二九—四三六頁）にも詳しく記されて居る通り峯吉・富藏・源之助と云ふ三人のものをさし、中でも源之助の墓の發見せられたのは全く文倉氏が此の無名の一水夫に寄せられた美しい感情に基づくもので、ひいては之が端緒となつて今日の研究の大成を見るに至つたと云ふが如き實に以て欣快事となすべきであらう。猶ほ此のことについては當時明治三十二年十二月四日付の時事新報にも報ぜられ、更にその記事が石河幹明著「福澤諭吉傳」にも轉載せられて居るが、同文中文倉氏を墓守であつたと記して居るのは氏が

此の墓を發見せんため好んで臨時の墓地管理人となれたことなので序でながら一言の説明を加へておく。また同記事に文倉氏の名を平三郎と記して居るのは、本書中他の機會に氏自ら語られて居るところによると、それが氏の本來の名であつて後に戸籍面の誤記のため平次郎とかはつたのだと云ふことであるから之も餘談ながらつけ加へておくでしょう。

さて最後に文倉氏の研究の努力について述べるわけであるが、それは明治三十一年から今日之が完成するまで實に四十年の歳月をよみして居るといふ點からも恐らくその推察はつくと思ふが、しかし筆者は勿論それを歲月の長短のみから決定するつもりでは斷じてない。それよりは寧ろ同氏が研究上極めて不遇と思はれる古河鑛業會社の一社員と云ふ立場に身をおきながら、而も終始研究を續けられたといふ點に於いて深く敬服するもので、之を思ふとき假令本書に多少の缺點はあらうとも、また事實資料の引用などには如何にも覺束なげな跡が見られもせぬではないが、夫れを口にするまへに先づ一應の敬意を表せずには居られないのである。筆者は曾つて或る會席にて偶然文倉氏と一座したことがあるが、その瘠身瘦軀の中に斯うした大業の祕んで居たことを思ふと白髮のその非常に靜穩なりし面貌に一閃の或る輝きをさへ感ずる。(菊判總頁七九二頁)(會田倉吉)

### 西洋史詳説 (内藤智秀著) (帝國書院刊)

本書は同氏の外國歴史(西洋之部)を教科書として教授する際

の教師用參考書として編まれたものであるが、非常に親切に且つ巧妙に出來てゐる。太古から大戰後の世界に至るまでを三百五項目に分け、これに三百五十三箇の註と參考書が添えてある。本文だけ讀めば樂に西洋史の全般に通ずることが出來、註だけ拾つて讀んでも中々興味ある事實が覺えられる。單に教師用として有益であるばかりでなく、一般讀者のためにも、又上級學校の受験參考書としてもよく、又高等學校程度の西洋史教材として使用することも出來て頗る便利である。試みにその註の一二を左に引用して見やう。

#### チギリス・ユウフラテス雙子河沿岸風光 チギリス (Tigris)

は矢を意味し、ユウフラテス (Euphrates) は大河を意味するが、其の下流地方バグダッド以東は河口まで三七五哩間僅に約百呎の傾斜を有するだけであるので下流の流れ極めて緩である。隨つて下流地方の沿岸には肥沃の土地多く棗椰子 (Date palm) を始め穀物類の繁茂が多く、北緯三十度内外であるので熱帶的な植物も尠くない。殊に多く茂る棗椰子はその實は住民の常食となり、葉は屋根を被ひ、皮は繩又は織物衣類となり、そして幹は家屋の柱となつて正に吾が國の稻にも當るのである。

#### ケマル・アタチュルク (Kemal Atatürk 1881—) ケマルはム

スタファ・ケマル (Mustapha Kemal) と云はれケマル・パシヤ (Kemal Pasha ケマル閣下の意) と呼ばれ又ガデー・パシヤ (Ghazi Pasha 常勝將軍の義) と云はれたが、最近(一九三四年)家名を稱へる様になつて自ら「トルコ人の祖」と云ふ意味でアタチュルクと稱するに至つた。彼は一八八一年サロニカの